

『深夜2時のcontact』

1

NA 「眠らない街：東京の夜空はまだ騒がしく：光つては消える最弱な想いを引きずりながら、明日への狭間を模索する：車の音、人々の叫びや嘆き、行き交う鉄道の軋む葛藤、移り変わるシグナルとネオン：全てが一瞬だけ止まる：ほんの数秒だけの無音：青い惑星にただ一人、風の音さえ聞こえない：深夜2時の：君へのcontact…」

2

線路の男 「僕らは、いつからこの惑星に立っているのか？僕はどうして生きているのか、生きるために働き、生きるためだけに明日を迎える…。疑問もない：嫌、疑問など持たずまた明日が来る…。もうすぐ僕だけの時間：深夜2時

3

って、私を優しく包み込んでしまうから：あたたかい：抱かれている時が何よりも幸せ：ねえ：私のどこが好きなの？え？全てじゃわからないよ：やだ：からだだけ可愛い：大好き：もう一回キスしてもいい？」

線路の男 「無音は一瞬：また惑星の歯車が動き出す：深夜2時の名前も知らない愛しい君への妄想contact：またどうかの深夜2時に：無音の世界で…」

線路の女 「また風の音がする：今日も私に付き合ってくれてありがとう：深夜2時の不思議な世界：この世界と私とあなただけの無音の日々：またこの惑星の上で…」

になる：ほんの一瞬だけ感じる無音の世界：そんな無音の空間で見つけた線路の向こう側で、毎日見かける君への妄想劇：数秒だけの幸せ：永遠(とわ)の飛行：また逢えたね…」

線路の女 「風の音さえ聞こえない：深夜2時が大好きだ：私は：私は愛されているのだろうか？あなたの全てが苦しい：出会った時にはもう戻れない：毎日見かけるあの人も私と同じ何も聞こえないこの世界の住人：どこかでつながる：妄想だけのcontact：不思議世界へようこそ：なんてね。」

コンビニ店員男 「いらつしやいませ」今日もまた同じ時間にやってくる：素敵な君：ほら：もうすぐ僕達だけの時間が止まる：何も聞こえない：誰にも邪魔されない：深夜2時がやってくる…」

客 女 「私は、、私はあなたを知らない。ただ止まる時を共有する唯一の存在：そんな目で私を見るのは、私と一つになるこの時間にあなたは気付いているかしら…」

店員男 「このまま君だけを奪い去りたい：月の光が照らしているかぎり：許される事ならば、今この瞬間、君を抱きしめたい：ただ：君を抱きしめてしまうと：この無音の時間が終わってしまう：流れる時はいつも僕に孤独と憂鬱だけを残す：君には僕が見えているのか？」

客 女 「何もないこの世界：私は今この星と一つ：つま先から髪の毛まで走るこの刺激に悶え：恥ずかしい吐息を吐いてしまいたい：あつ：私の中に入り込む激情の流れ：気が変になりそう：もうだめ：私は：私は罪深き汚れしもの…」

線路の男 「君の名前は：そうめぐみ、僕はいつも君の為に生きているんだ：愛してる：君のために笑い、君のために泣く：明日はきつと僕達の為にあるんだね：君の瞳、艶のある髪、しなやかなその体：全て僕のものなんだよ：いい香りだ：柔らいその唇は罪の象徴：君に出逢えた事：神に感謝しなくちゃね…」

線路の女 「あなたは、私の体が大好き：わかるわ、いつもそうや

店員男 「また地球は動き出す：抱きしめる事なんて出来やしなない。深夜2時によろこせ「いらつしやいませ、お弁当温めますか？」」

客 女 「一瞬だけの脱力感に浸りながら、私は今日も満足してい

る …「今日は、温めなくて…いいです…」明日は温めて下さいね…」

主婦「私はただの平凡な主婦…夫と子供が寝静まるのを待ち、パソコンの電源を入れる。夫には良き妻、子供には良き母を演じ、PCの向こう側の彼には独身を通す、。私は嘘つきだ。お気に入りのマグカップに注いだ熱いミルクティーと、学生の頃付き合っていた彼から貰った膝掛けを準備して…キタキタいつも決まってこの時間…Web世界の妄想彼氏…多分彼は学生…そして私にぞっこん…今夜も甘くて雑な意味などない時間が始まる…」

相手男「実の彼女とは距離を置き…実在しないネット上の女とチャットをしている…俺はどこか矛盾している…実在している彼女が言っていた…無音な時間…深夜2時…俺はそれの虜だ…無情にも俺は実の彼女よりも実在しないこの

女との時間を大事にしている…もうすぐ深夜2時…彼女と地球と一つになる…そんな刹那へ…、目を閉じて…もうすぐ誰も近付けない…僕達だけの時間深夜2時だから。

主婦「了解、今、目を閉じるよ…そしたら、一つだね…。何も聞こえない…何も見当たらない…ミルクティーの甘い香りと昔の彼の温もり…私はずっと一人じゃない…こうして、知らない人とも繋がる…私はデジタル社会の歪み…このままこの永遠が続いたら…私は…もう…戻れない…」

相手男「空気が弾ける音が宙に舞い…閃光は波のしぶきのように注がれ…緩やかでもなく…穏やかでもない…走る事も、立ち止まる事もない…正に無だ…深夜に一瞬だけ感じる、大地の呼吸…生きているんだ…」

主婦「一瞬だけ…あなたを感じたは…私はこの時間を逃したら、現実社会の奴隷にされる…明日がまた始まろうとしている…おやすみ。」

相手男「僕は明日の反逆者…君への想い…仇なす言葉、全てが妄想…僕は学生でもなく…孤独の寂しさへ君を招待してしまった。地の底の亡者…全ては僕の災い…今までの偽りをお許し下さい…君との時間を胸に…今日という日が永遠でありますように…さようなら…」

主婦「…それでも…愛してた…馬鹿だな…私も嘘…だらけなのに…」

男

「こうして俺は過去に縛られ…希望を求め…今夜も一瞬の透明感に沈む…あいつも同じ夜空を眺めているのか…友と呼べるあいつと離れ、もう12年がたつ…壊れた友情は修復できず…俺は大人になる…あの時俺はあいつの言う社会の意味もわからないすねたガキで…無邪気とは程遠いくらいの、哀れな生き物に過ぎず…変わり行く街並みに背をむけ…己のみの真実に突き進む我が儘な臆病者だ

った…俺はあいつが羨ましいだけだ…あいつは何も変わらない…むしろ変わってしまったのは俺の方だ…悲しみは宙に舞い…怒りは眩しさを覚え…希望はこの一瞬のみ…今ならあいつこう言える、世界中のどんな奴よりも、お前がいつもそばにいてくれた、勇気をありがとう、自由をありがとう、俺の友はお前だけだ…仲直りしようぜ。そうガキの頃のように…あいつも同じ気持ちでいるさ。わかるんだ…親友だから…流れ星に変わっちゃった、もう会う事の出来ない親友へ…今日はあいつが空に昇った12回目の夜だった…じゃあな。現実が待ってるからまた来年この深夜に…」

なおこ「私にとって大切な時間深夜の時…全てが止まり…全てが透き通る…風のおい、星達が照らす灯り、緩やかな想像…私には生きる意味があり、死を目的とし、限りある

命を燃やすのか…今、私はこの蒼い惑星の一部…私まで  
透き通りそう…この数秒間が永遠であり…儂くも妄想  
だけ…誰か…私を抱きしめて…」

小熊「孤独はいつも突然…何？どうしたの？なぜ何も聞こえないの？宇宙に私ひとりきり…私の全てをさらけ出し愛欲のまま…この妄想世界に身を任せ…辱め(はずかしめ)ながら落ちてゆく…そう…アダムとイブのように…禁断の…あつ…あつ…もつと…私を…滅茶苦茶にして…」

なおこ「妄想なのに感じるあなたのぬくもり…私がかんにはしたくない女だったなんて…やだ…誰にも言えない…本当の私は…本当の私は…きつと天使も呆れるほどふしだらな女なのかも知れない…でも…このまま…私を抱きしめていて…お願い…月が雲に隠れている間だけ…」

小熊「あ…あ…は…は…ん…こんなじゃ満足できないよ…だって…だって私は墮天使なんだよ…もつといっぱい見つめてくれなきゃ…淋しくて私、消えちゃうよ…朝も夜も夏も冬も…同じスピードで愛してほしい…だから…もう一

度…あつ…あつ…あつ…」

なおこ「この一瞬に永遠の時間を重ね…愛の海深く…欲の空高く…あなたを愛する事が出来たら、例え夢でも妄想でも構わない…そこから全てを始めればいい…」

小熊「繰り返す事の出来ない時の中…せめて妄想世界だけは毎日同じ過ちを繰り返す…この時間がなければ私が生きる証が見つからない…」

なおこ「また時間が動き出す…そうだ、たまには小熊さんに電話でもするか…」

小熊「明日の生きる証…妄想世界…私だけの時間…あつなおこ何してるのかな？」

電話をする

なおこ「もしもし、小熊さん？今何してた？」

小熊「ちよっとした妄想かな…うふふふ、なおこは？」

なおこ「私は…私は…この惑星に抱かれてたよ」

小熊「何それ」

二人「アハハハハハ」

NA

「深夜2時…世界が止まる、唯一の微笑み…孤独はいつも闇を生み…人を絶望の未来へと誘(いざな)う…透き通りそうなこの時間…この空間、きつと宇宙に触れているのかもしれない…なぜ、一瞬だけ世界が無音になるかはわからないが…多分…この惑星にも息抜きが必要なんだろう…深夜2時…無音の世界を感じたら…それは青い惑星の深呼吸…感じて下さい…深夜2時のcontactを…」